

PROGRAM
ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ第28番 イ長調 Op.101 Ludwig van Beethoven：Piano Sonata No.28 in A Major, Op.101
I. やや生き生きと、そして極めて深い感情を込めて II. 生き生きとした行進曲風に III. ゆっくりと、そして非常に憧れに満ちて－速く、しかし度が過ぎず、そして決然と
シューマン
ピアノ・ソナタ第1番 嬰へ短調 Op.11 Robert Schumann：Piano Sonata No.1 in F-Sharp Minor, Op.11
I. 序奏：少しゆっくりと－生き生きと速く II. アリア III. スケルツォ：非常に速く－間奏曲－ゆっくりと IV. フィナーレ：やや堂々とした速さで
ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ第31番 変イ長調 Op.110 Ludwig van Beethoven：Piano Sonata No.31 in A-Flat Major, Op.110
I. 中庸な速さで、歌うように、非常に表情豊かに II. 非常に速く III. ゆっくりと、しかし遅すぎずに－フーガ：速く、しかし速すぎずに
シューマン
幻想曲 ハ長調 Op.17 Robert Schumann：Fantasie in C Major, Op.17
I. どこまでも幻想的に、そして情熱的に II. 中庸な速さで III. ゆっくりと、そして荘重に

PROGRAM NOTES
ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ第28番 イ長調 Op.101

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)はピアノ・ソナタというジャンルを大きく発展させ、同時にこのジャンルにおいて自らの音楽性を拡大し続けた。とりわけ後半生に書かれた作品は形式の枠を離れ、旋律、和声がより充実していくことでロマン派の扉を開くものとなっている。1815年から16年にかけて書かれた第28番は、前作の第27番ホ短調(Op.90)からその傾向が強まっており、カンタービレな旋律、そして教科書的なソナタ形式からの完全な脱却という2つの面によって大きく新しい時代を切り開いた楽曲である。第1楽章はイ長調でありながら、主音での開始を避け、伸びやかな旋律が歌われていく。第2楽章は遠隔調のへ長調で行進曲風の楽想が展開する。第3楽章は「ゆっくりと、そして非常に憧れに満ちて」という指示を持ち、途中で第1楽章の旋律が回想される。

シューマン
ピアノ・ソナタ第1番 嬰へ短調 Op.11

ロベルト・シューマン(1810-1856)が1832年から1835年にかけて書いた楽曲で、1836年に出版。初版の際は《フロレスタンとオイゼビウスによるピアノ・ソナタ、クララに献呈》というタイトルが与えられていた。動機の有機的な発展に強いこだわりが見られ、歌曲の旋律も引用するなど、彼にとっての初のピアノ・ソナタということもあり、かなりの意欲作となっている。曲は4楽章から成り、序奏つきの第1楽章は1832年作曲の《アレグロ・ファンダンゴ Anh. F15》を改作したもの。序奏は三連符の伴奏と鋭い付点のリズムが特徴的で、すでに第2楽章の主題も聴こえてくる。主部に入ると、力強いファンダンゴのリズムが特徴的な主題が奏でられる。第2主題は対照的に和声を主体とした

内向的な性格であり、シューマンの中にある情熱的な「フロレスタン」、内気な「オイゼビウス」が2つの主題に反映されていることが窺える。第2楽章は“アリア”と指示されているように歌謡的な性格が強い。それもそのはずで、1827年に作曲した自作の歌曲《11の初期の歌 WoO 121-1》の第9曲〈アンナに寄せてⅡ〉の主題を使用。第3楽章も舞曲的な性格が強く、中間部にはポロネーズのリズムが表れる。また自由なレチタティーヴォが置かれているのが特徴。古典的な様式のソナタの中にも新しさを取り入れようとしたシューマンの意思が見える。第4楽章は分厚い響きの長大なロンド。

ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ第31番 変イ長調 Op.110

ベートーヴェンのピアノ音楽は、つねに当時大きく進化していたピアノとともにその可能性を広げていった。革新的な書法とドラマティックな表現によってロマン派音楽の先駆けともいえるものであったが、このソナタは特にロマン派の音楽における抒情性につながる作品である。第1楽章は簡潔なソナタ形式だが、彼の作品の第1楽章としては異例の曲想。優美な主題を持ち、落ち着いたテンポと表情豊かな発想の指示が置かれている。第2楽章のスケルツォは、強弱の強烈な対比が印象的。主題には当時流行していた風刺的民謡の旋律が引用されているとの説がある。第3楽章は、序奏部と「嘆きの歌」と書かれた二重のアリオード・レント、そしてフーガで構成されている。受難曲のアリアを思わせるアリオード、そして苦悩と絶望に打ち勝とうとするかのような輝かしさに満ちたフーガは、「苦悩から歓喜へ」というベートーヴェンの精神を体現するかのようである。

ピアニスト・音楽ライター：長井進之介
シューマン
幻想曲 ハ長調 Op.17

シューマンにとって、1835年から1840年の5年間は愛するクララ・ヴィーク(1819-1896)との恋愛に翻弄された波乱の日々であった。そのような状況の中で生まれたこの作品は、「この曲はあなたを想う深い悲しみの表現です」と述べているように、クララへの想いが込められている。一方で、もともとは、フランツ・リスト(1811-1886)が提唱した「ベートーヴェン記念碑建立募金」に寄付するために書き始められたものであった。ベートーヴェンの生涯を描く目的で、各楽章には「廃墟」「凱旋門」「星の冠」という標題も付けられていたのだが、最終的にそれらは削られ、“ひそやかに耳を傾ける者のためにひとつの優しい調べがきこえる”という、フリードリヒ・シュレーゲル(1772-1829)の詩がモットーとして掲げられた。シューマンはクララに対して「あなたこそ、この詩の“調べ”ではありませんか?僕はそうであると信じています」と手紙に書いており、作品が「ひそやかに耳を傾ける者」のための存在、すなわちクララへの想いを表したものとなっている。さらにシューマンは、ベートーヴェンの歌曲《はるかな恋人に寄す Op.98》から“恋人よ、あなたのために歌うこの旋律を受け取ってください”という旋律を、第1楽章の最後にほぼそのまま引用する他、動機として散りばめ、クララとベートーヴェンへの敬愛を曲に込めている。輝かしい第2楽章は、跳躍などの高度な技巧を必要とする行進曲。もともと「星の冠」という副題を持っていた第3楽章は、クララへの永遠の愛の誓いとベートーヴェン讃歌が見事に両立した楽曲である。